



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2879 号 2016.2.21 発行

社説：世界の貧困と不平等 「分配」を共有できるか 朝日新聞 2016年2月21日

世界の資産家の上位62人が持つ富は、全人口の下位半分、36億人が持つ資産の総額に匹敵する。国際NGO「オックスファム」は、そんな衝撃的な分析結果を公表した。

エボラ出血熱やジカウイルスなど、感染症の脅威がじわじわと広がる。大地震や、地球温暖化との関連が疑われる豪雨・水害をはじめ、自然災害が世界の各地で相次ぐ。

■国連の新たな目標

一見すると無関係な両者は「貧困」でつながる。格差・不平等の拡大が深刻さを増すなかで、疾病や災害はとりわけ貧しい人たちを直撃し、それが不平等の拡大に拍車をかけるという悪循環である。

どう歯止めをかけていくか。国際社会は今年、あらゆる貧困をなくすという究極の目標を掲げ、15年後を見すえて「持続可能な開発目標（SDGs）」に向けて動き出した。

経済と社会、環境の三つの調和を目指す目標の対象は幅広い。経済成長から教育や保健、社会保障と雇用、気候変動まで、17分野で169の項目が並ぶ。「誰も取り残さない」をうたい文句に、昨年秋に国連であったサミットでは全ての加盟国が賛成した。

持続可能な開発という考え方が明確に打ち出されたのは、ブラジル・リオデジャネイロで四半世紀前に開かれた国連環境開発会議（地球サミット）だった。国連と各国政府にNGOも加わって2年余り討議を重ねた新たな目標は「検討の過程、内容ともに画期的」と評される一方、世界が抱える未解決の課題の膨大さを浮き彫りにする。

しかし、立ち尽くしたままではいけない。

■難題は資金の確保

あらゆる課題の根底に横たわるのが、対策資金をどう確保するかという難題だろう。主に先進国が拠出する途上国援助（ODA）や、世界銀行など国際金融の仕組みだけではとてもまかなえない。途上国や貧困国向けに、返済の必要がない資金を用意できる枠組みを作りたい。

2000年代半ば、フランスを中心に始まった「革新的資金調達」は、その一例だ。従来の発想を超えることから出発する試みは、フランスや韓国など十数カ国が導入済みの「航空券連帯税」に結びついた、航空運賃に一定額を上乗せし、それを感染症対策などに充てている。独仏を中心とする欧州の11カ国は金融取引税の研究を続けている。株などの取引に薄く課税し、投機的な資金の動きへの抑えとしつつ、国際課題への対策に使うのが狙いだ。金融街シティーを抱える英国などが反対し、参加国の減少や課税対象取引の絞り込みを強いられ、導入時期も延びている。最近の市場の混乱もあって先行きは不透明だが、11カ国の意思はもっと注目されてよい。

「所得格差（不平等）を是正すれば、経済成長は活性化される」。先進国中心の経済協力開発機構（OECD）がこんな分析を報告してから1年余り。米大統領選では民主党の候補者選びで不平等の是正を掲げるサンダース氏が支持を集め、日本でも経済成長に軸足を置いてきた安倍政権がにわかに「分配」を唱え始めた。

開発途上国・地域で5人に1人が1日あたり1ドル25セント（約140円）未満で暮

らす極度の貧困と先進国のそれは、水準こそ異なるものの構図は共通すると言っている。
成長か、分配か。グローバル化か、反グローバル化か。

1990年代末、通商の自由化を目指す世界貿易機関（WTO）の閣僚会議を標的に始まった反グローバル化の抗議運動は、主要国首脳会議（サミット）や国際金融機関の総会に飛び火し、リーマン・ショック後には「1%に支配される99%」運動が盛り上がった。

それでも、ヒトやモノ、カネ、情報などあらゆる側面で、グローバル化はいや応なく進んでいる。ならば、そのひずみを正し、成長というパイの拡大に結びつけ、分配の原資にできないか。SDGsはそんな問いかけでもあるだろう。

■企業の変化を生かせ

反グローバル化運動で批判されてきた多国籍企業にも変化の芽が生まれている。企業の社会的責任（CSR）という意識を超え、環境への目配りや社会の不平等の解消を自社のビジネスの前提かつ機会ととらえる経営だ。自然環境からどんな恩恵を受け、影響を与えているかをはじく「自然資本会計」といった試みは、昨年末の国連気候変動会議（COP21）でのパリ協定を受けて拍車がかかりそうだ。

そんな「民」の変化を補い、加速させるためにも、政府の行動が重要になる。5月には日本でサミットがある。テロや難民、中東や朝鮮半島の不安定化など課題は山積しているが、共通する要因が貧困だ。世界を主導する国々の首脳が議論すべき課題である。

<金口木舌>介護を愛し、共に生きる

琉球新報 2016年2月20日

川崎市の老人ホームで起きた認知症の入所者3人の転落死事件。最初に死亡した男性の殺害容疑で元職員（23）が逮捕された▼入所者に繰り返した窃盗事件でも逮捕されていた。計画的殺害も示唆され、介護のストレスといった理由も取り沙汰されるが、解明はこれからだ。この施設、別の職員の入所者虐待も発覚した▼「介護を愛し、共に生きる」との主題を追究する木村浩子さん（78）は、脳性小児まひによる言語障がいと両手右脚硬直の重度障がいがある。伊江島で平和と福祉を考える「土の宿」を始めて34年、信条は「平和でなければ福祉は成り立たない」▼「共倒れになる前に、共に生きていくことを考えよう」。介護を必要とする側と支援する側の人権をどちらも大切にしようと言いつける。派遣ヘルパー事務所増加の一方で内容の伴わない介護も増えたと指摘、低賃金で人の命に関わる介護者の待遇改善も訴える▼山口県生まれ。戦時中に日本兵から「足手まといだから（娘を）殺せ」と青酸カリを手渡された母と共に逃げ、生きた。「障がい者は施設でおとなしく生活すべきだ」という世間もよく知る▼介護を愛し、共に生きるとは何だろう。木村さんはいつも涼しい笑顔、たまに痛快な“毒舌”で老若男女をいや応なく引き付け、笑いと一緒にそのヒントを与えてくれる。何度でも繰り返し考えたい。

認可外保育施設、37%が国の基準満たさず 14年度 伊藤舞虹

朝日新聞 2016年2月19日

2014年度に自治体が立ち入り検査をした認可外の保育施設のうち、37.6%が国の指導監督基準を満たしていなかった。厚生労働省が19日公表した。前年度（39.6%）より少し減ったものの、依然として高水準が続いている。

認可外保育施設は昨年3月末時点で8038カ所あり、20万1530人の子どもが利用する。立ち入り検査は5343カ所で実施し、そのうち2007カ所は子どもや職員の健康診断、消防計画策定などを怠っていた。午後8時以降の預かりや宿泊を伴う保育をする「ベビーホテル」に限ると、1134カ所のうち555カ所と半数近くが守っていなかった。保育従事者が足りない施設も170カ所（15.0%）あった。

厚労省保育課の担当者は「引き続き指導監督を徹底したい」と話している。

自治体は基準を満たさなかった全ての施設に指導や勧告などを行った。このうち鳥取県は、

男性園長が園児をたたくななどの虐待をしたとして、鳥取市内の施設に事業停止命令を出した。(伊藤舞虹)

法テラスと自治体 高齢者の虐待や借金問題で連携強化 佐賀新聞 2016年02月20日
高齢者の法的トラブルの対応をテーマに意見交換する出席者たち=多久市まちづくり交流センターあいはれっと

高齢者の法的トラブルをテーマにした、法テラス佐賀(松尾弘志所長、佐賀市)と自治体の意見交換会が、多久市であった。弁護士や福祉担当の職員ら約30人が参加し、借金や虐待などの問題が起きた場合に連携を強化することを確認した。



法テラス佐賀の柿木翼常勤弁護士が、実践報告で生活環境に問題を抱える高齢者への対応内容について説明した。自治体職員の相談を受け、ケース会議に出席したり成年後見人の手続きを進めたりしたことを挙げ、「相談先の紹介など法的解決に向けたアドバイスもできる。相談窓口を活用してほしい」と呼び掛けた。

出席者からは介護保険のサービス料金滞納への対応などについて質問が出た。法テラス佐賀では法的トラブルを抱える高齢者の増加に伴い、地域包括支援センターや社会福祉協議会の職員らの相談を受け付けるホットラインを開設している。

絵画や写真 言葉で鑑賞...視覚障害者へ健常者解説 読売新聞 2016年02月21日

健常者の言葉を通して、視覚障害者が絵や写真を鑑賞する取り組みを横浜市青葉区の「市民ギャラリーあざみ野」が続けている。見えないもの、見えにくいものを言葉で伝え、理解してもらうにはどうしたらいいか。参加者も同ギャラリーも一緒に考えている。(宮本友香)

「これはエネルギーのある作品ですね」「どうしてですか?」「写真全体に赤や緑など鮮やかな色彩がいっぱいです」今月6日に同ギャラリーで開かれたイベント「アートなピクニック」。視覚障害者と健常者が一緒に芸術作品を楽しむ企画で、いつもは静かな展示室で熱心な言葉のやり取りが繰り返された。

この日は、視覚障害者4人を含む高校生から70歳代までの男女20人が参加。職員から企画展の概要などの説明を受け、グループに分かれて鑑賞を始めた。作品の解説と質問を繰り返しながら一緒に歩く。

今回の展示は、新進気鋭の写真家・石川竜一さん(31)の作品。人物や風景から、模様のような抽象的な作品まで約500点が並ぶ。

表現しにくい作品の前で言葉に詰まる人も。イベントを担当する日比谷安希子さんは「マニュアルも正解もなく、毎日が試行錯誤です」と見守る。石川さんも会場を訪れ、「どんな気持ちの時にシャッターを押すの」などと質問を受けた。「みなさんの質問を聞き、自分の作品のあり方を考えさせられました」と石川さんは話した。

鑑賞後の意見交換では、健常者から「説明が難しかった」という感想が出された。同時に、話し合いながら鑑賞することで、多角的な視点が得られ、「1人で見るより数倍楽しめた」「感動が増えた」といった評価が相次いだ。視覚障害者からも「楽しかった」「また来たい」と好意的な声が続いた。

参加した全盲の野沢鉄男さん(82)は「難しく考える必要はなく、見たまま感じたままを伝えてほしい。みなさんと同じように、リアルタイムで作品を感じたいんですよ」と呼びかけた。

「アートなピクニック」は2012年に始まり、年に数回ペースで開催している。日比

谷さんによると、視覚障害者は障害が先天的か後天的かでイメージの膨らませ方が異なり、鑑賞に必要な情報もかわってくるという。「難しい取り組みだが、こうしたイベントは必要。障害のあるなしにかかわらず、芸術を楽しみたい人には扉を開け、思いに応えたい」と日比谷さんは話している。石川さんの企画展は21日まで。入場無料。

巣立つ2016(25) 伊万里特別支援、うれしの特別支援、唐津特別支援、中原特別支援

佐賀新聞 2016年02月20日

■伊万里特別支援

田上 歩(たがみ・あゆみ) 県障害者技能競技大会喫茶サービス種目に出場した。入賞は逃したが、練習に努力した。結婚式場に就職予定。「祖母や両親に恩返しをしたい」と話す。伊万里市立花町。

前田 晴佳(まえだ・はるか) 何事にも積極的に取り組み、寄宿舎では「舎生会」役員を務めた。漢字検定にも挑み、5級を取得した。就業体験を生かし、老人ホームに就職する。伊万里市南波多町。

副島 愛佳(そえじま・あいか) 生徒会長を務め、学校行事を盛り上げた。体育祭で高等部全員で演じた「スタンプ」が一番楽しかった思い出という。福祉サービス事業所で働く。伊万里市大川内町。

重富 亮太(しげどみ・りょうた) 作業学習などに粘り強く取り組み、困っている人の世話や手伝いをした。福祉サービス事業所で働き、「好きな野球をしたり、試合を見てみたい」と話す。白石町。

■うれしの特別支援

大園 愛未(おおぞの・なるみ) 以前は人前に立つのは苦手だったが、生徒会長に立候補して「自信がついた」。総合文化部のコンサートでもセンター役に。「将来は保育園で働きたい」と語る。嬉野市塩田町。

田崎 さおり(たさき・さおり) 自分で考えて行動できるようになり、周りも「一番成長した」と評価を寄せる。県障害者スポーツ大会などに出場した。夢は「お金をためて一戸建てを買うこと」。大町町。

松本 駿矢(まつもと・しゅんや) フライングディスクで国体3位に入賞した。それでも「緊張してミスがあり、悔しかった」と語る。農協に就職し、「働いて自分の車を持ちたい」と話す。鹿島市山浦。

北島 友美(きたじま・ともみ) 絵が好きで、県高校美術展覧会では毎年、佳作に選ばれるほどの才能を見せた。春からは福祉作業所へ。「電車で通うのが楽しみ。列車旅もしたい」と夢見る。白石町。

■唐津特別支援

石井 由華(いしい・ゆか) 校内の紙工班や被服班で製品を作る喜びや販売の楽しさを経験した。障害福祉サービス事業所にこここいまりで働く。「仕事をしてお金をためて旅行に行きたい」。伊万里市二里町。

井手 沙也加(いで・さやか) 小学部から12年間通い、元気に活動した。最も心に残っているのは校内駅伝大会での優勝。友人に車いすを押ししてもらい「風のように走ることができた」と語る。伊万里市松浦町。

岩上 愛斗(いわかみ・まなと) 児童生徒会副会長。あいさつ運動やまつら祭の企画で力を発揮した。大阪への修学旅行が思い出。唐津魚市場加工部に就職し、「家族を持って幸せになりたい」。唐津市呼子町。

廣 智也(ひろ・ともや) 小学部から12年間学び、体育ではいろんなスポーツに挑戦、校外学習では映画鑑賞を楽しんだ。「一人で買い物に行き、自分の洋服やカメラを選びたい」と目標を掲げる。有田町。

■中原特別支援

池田 雅俊（いけだ・まさとし）文化祭で人生で初めて友人たちと食卓を囲んだ。「会話しながらの食事は楽しかった」。アイエスエフネットライフ佐賀で学び、在宅での就職を目指す。鳥栖市元町。

青木 悠介（あおき・ゆうすけ）高校で集団活動ができるようになり、階段も1人で上れるようになった。修学旅行で訪れたU S Jでは「ジョーズのアトラクションが楽しかった」と話す。鳥栖市鎗田町。

黒木 雄太（くろき・ゆうた）体育祭では旗手として大会を盛り上げ、優勝を勝ち取った。鳥栖市のトライアル・ロジスティックに就職し、「仕事を頑張り両親をハワイに連れて行きたい」。基山町。

吉村 恭子（よしむら・きょうこ）学齢は超えているが、音楽や美術、読み物など教科を問わず率先して学ぶ意欲を見せた。「周囲への感謝を忘れず、人との関わりを楽しんでいきたい」。みやき町。

地域カフェ、“顔”つなぐ 「ふら〜っと壱岐南」運営1周年【福岡県】



西日本新聞 2016年02月21日
大勢のお年寄りでにぎわう「ふら〜っとカフェ壱岐南」
福岡市西区・壱岐南校区のコミュニティーカフェ「ふら〜っとカフェ壱岐南」が今月、運営開始から1周年を迎えた。カフェは高齢者や障害者、子育て世代などが集う地域の“お茶の間”として公民館などに設けられるケースが多いが、壱岐南は介護施設を訪ねる移動型。しかも

行政に頼らず、住民、商店主、事業所がスクラムを組んで運営しているのが特徴だ。利用者の評判も上々で、各地から視察も相次いでいるという。人気の秘密を探ろうと、カフェをふら〜っと訪ねた。

「久しぶりやんね」「元気にしとったね」。7日、校区内にある特別養護老人ホーム「マナハウス」のホール。約80人のお年寄りの笑顔が広がっていた。

エプロン姿の住民たちがお茶やコーヒーをテーブルに運ぶ。一角には商店主が持ち寄った野菜や弁当が並び、ネイルやマッサージのコーナーも。行政書士など専門スタッフが相続や終活の相談にも応じる。

この日参加したボランティアは、小学生から70代までの約50人。お年寄りの送迎も施設側が無償で担う。「独り暮らしだから、いろんな人に会えるのが楽しみ。送迎も助かります」。城戸アキヨさん（86）は毎回カフェを楽しみにしているという。

壱岐南校区の人口は1万431人（昨年12月末）で高齢化率は34・1%。西区の1万人以上の小学校区で唯一30%を超えている。

孤立死の懸念、引きこもりによる地域との断絶…。地域を挙げてお年寄りを支えようと、自治協議会や民生委員、介護事業所などの有志でつくる実行委員会が母体となり、昨年2月からカフェの運営を始めた。

スタート時こそ、県の助成金を頼ったが、その後の運営費は全て自己調達。訪問のたびに設置する竹製の「募金竹」には1万円前後が寄せられ、全戸に配布するカフェ開設の告知チラシで事業所の協賛金を募る。

サービス付き高齢者向け住宅「かりん」と月に1度、交互に訪ねる。自治協議会長の本庄敏雄さん（69）は「皆さん、積極的に関わってくれる」と感謝する。

移動型、無償送迎、資金調達の手法一。市社協によると、市内62カ所のカフェのうち、こうした「壱岐南方式」の運営は他にみられないという。このため、市内のほか県外の自治会などからの視察や問い合わせが相次いでいる。

募金と協賛金の収入は月2万円ほど。やりくりは大変だが「背伸びせず、身の丈にあつ

たカフェだからこそ続けることができるのではないのでしょうか」と、実行委員長の小金丸誠さん(42)。この1年間、カフェが地域に根を張りつつあるのを実感する。それでも「まだ利用していないお年寄りが多い。地域に活動の趣旨を行き届かせて、ボランティアもさらに増やしたい」。誰もがふら〜っと立ち寄って、世代を超えてつながる。顔が見える地域づくりは、これからも続く。

ケアノート 渥美由喜さん 介護・子育て相乗効果…父は笑顔に 息子は優しく

読売新聞 2016年2月21日



「今、父にとって一番幸せな時間は孫たちと過ごす時間。介護といっても僕は付き添いみたいなものです」(東京都千代田区) =秋月正樹撮影

ワーク・ライフ・バランスのコンサルタント、渥美由喜さん(48)は、父・光純さん(80)の介護と子育てという「ダブルケア」を抱えながら、仕事を続けています。息子は9歳と6歳。光純さんは認知症で要介護1。「育児と介護が同時だと、『大変ですね』と言われますが、メリットも大きいんです」と話します。

精神科に入院

2009年のことです。夜中に目を覚ますと、枕元でガラガラと笑い声がしました。実家で一人暮らしをしているはずの父です。車であちこち走り回った末、渡してあった合鍵で入って来たのです。

後日、気晴らしになればと父を車で連れ出しました。すると、今度は運転中の僕の首を絞め始めたのです。軽い認知症でしたが、それにしても暴力的です。その後も色々あり、その年の暮れに精神科に入院させました。

認知症と統合失調症の併発との診断でした。統合失調症は若い時に患ったことがあったのですが、02年の母の他界を境に、服用していた薬を飲まなくなっていたのです。

父が入った隔離病棟は、鉄格子に遮られていました。その中で、シーツをかぶってしゃがみ込んでいる父の後ろ姿に、僕は泣き崩れました。

幸い、光純さんの統合失調症は劇的に回復し、3か月で退院できた。その頃に次男が生まれ、渥美さんは育児休業を取り、しばらく実家に泊まり込んだ。後々必要と考え、介護休業は取らなかった。

恩返しでき幸せ

育休を取るのには長男の時に続いて2回目でした。育児は妻と分担していますが、妻の方が高給だから僕が取るのが合理的なんです。上司はいい顔をしません、全く気にしません。僕自身、発達障害です。このため、いわゆる「空気を読む」ことが苦手で、小学生の時から人の言葉の裏が分からず、けんかやトラブルが絶えませんでした。両親はこれを個性ととらえ、小さい頃から長い目で見てくれました。だから、介護は恩返しだと思っています。母は亡くなりましたが、父にだけでも親孝行できて幸せです。

弟夫婦や妻も助けてくれますが、介護の中心的存在は僕です。僕の父親ですから。父は一時期、便意に気付かずオムツをしていましたが、排せつ介助は実の息子でもつらいものです。義理の関係ならなおさらでしょう。

光純さんは今は一人暮らし。渥美さんはデイサービスやヘルパーを活用しながら、通いで介護を続ける。仕事が中断されることもよくあるという。

IT機器を活用

父の行動は、まるで突発の嵐。「お母さんがいないから捜しに行く」と仕事中に電話してきたり、詐欺に遭いかけたり。持病の肺気腫でたびたび入院もします。デイサービスの人に酸素吸入器の管が逆になっているのを指摘されたのに、それを頑として認めず、僕が駆けつけたこともあります。

こうなると僕は顧客のところに行けません。代わりに部下を送り、パソコンのテレビ電

話でやりとりします。徘徊する父を追跡しながら、仕事をしたこともありました。仕事を辞めたら一時的には楽かもしれませんが、仕事には介護ストレスを分散してくれるメリットもあります。ITツールをフル活用し、どこまでできるか試そうと思っています。

夕方、学童保育や保育園から息子たちを引き取って実家へ直行。夕食を作って4人で食べ、入浴後に帰宅。ちょうど妻が戻るので育児を交代——。渥美さんは2日に1度こういう生活を続ける。

父の症状が重い時は「お前は宇宙人だ」と言われ、手も上げられました。でもダブルケアだからこそ、乗り越えられたと思っています。介護と育児の相乗効果ですね。育児の大変さがわかると、「自分も小さい頃、親に迷惑かけたな」と思い返し、父の言動も苦にならなくなるのです。

それに、介護は子どもを交えたほうが絶対いい。父は生きる希望を持つようになったし、息子たちも弱者に優しい子に育ちました。バスの中で率先してお年寄りに席を譲ります。父には子育てを手伝ってもらっているようなもの。むしろ感謝しています。

デイサービスの帰りに果物を買うのが父の日課。その果物を父が切って出すと、息子らは大喜び。「ありがとう」と言われた父は、満面クシャクシャの笑みになるのです。できるだけ、こんな場面を作るようにしています。

息子たちには今後も父に関わらせません。成人後は本人次第ですが、どれだけ自主的に開かれる人間になるか。僕の子育てが問われるところです。(聞き手・植松邦明)

あつみ・なおき ダイバーシティー・コンサルタント。東レ経営研究所主任研究員。1968年、東京都生まれ。企業を対象にワーク・ライフ・バランスに関する相談に応じる。厚生労働省「政策評価に関する有識者会議」委員。著書に「長いものに巻かれるな！」(文芸春秋)。

◎取材を終えて 渥美さんの実家を訪ねると、光純さんが孫たちと楽しんでいた。肺を病んで鼻にチューブを付けているものの、かつての症状の重さなどみじんも感じさせない。ソファで孫を抱きかかえたり、野球ゲームの相手をしたり、宿題をする孫をほほ笑ましくみつめたり……。「私は恵まれています」と、生き生きした笑顔で語る光純さん。渥美さんが子どもを交えた介護を勧めるわけを改めて実感した。

家族による高齢者虐待608件 26年度 埼玉県調査 産経新聞 2016年2月21日

平成26年度に高齢者が同居する家族などの養護者から虐待を受けたとして、県内の市町村が受けた相談・通報件数は前年度52件増の1211件で、このうち市町村が虐待と認定したのは同2件増の608件だったことが、県の調査で分かった。虐待したのは息子が最も多い259人で、夫150人▽娘123人▽嫁36人▽妻32人—など。虐待された高齢者は8割弱が女性だった。(川峯千尋)

県地域包括ケア課によると、調査は18年4月、高齢者虐待防止法が施行されたことに伴い毎年実施。各市町村で受けた通報件数を県が集計している。

家族ら養護者による虐待は22年度の681件をピークに、毎年600件代で高止まり状態が続いている。通報者別では、警察や市町村職員によるものが増加しており、同課は「虐待が疑われる事案について、県警や市町村職員は必ず通報するよう徹底していることが影響しているのでは」としている。

虐待の種別(重複あり)で見ると、殴る蹴るなどの身体的虐待が477件(50・3%)で最多。そのほか、暴言を吐いたり無視するなどの心理的虐待254件(26・8%)▽食事を与えないなどの介護・世話の放棄114件(12・0%)▽財産を搾取するなどの経済的虐待103件(10・8%)▽性的虐待1件(0・1%)—と続いた。

一方、養介護施設での虐待では48件の相談・通報があり、うち10件を虐待と認定。虐待を受けたのは70～90代の男女11人で、身体的虐待が7件、性的虐待2件、介護放棄1件。いずれも改善報告書を提出させるなどの指導を行った。

同課は介護疲れから家族が虐待に走るケースも多いと指摘し、「少しでもおかしいと思っ

たら、高齢者だけでなく家族を救うためにも、空振りを恐れず通報してほしい」と呼びかけている。介護に関する悩みがあれば、各市町村の地域包括支援センターや認知症介護の相談ダイヤル（電）048・667・5553などでの相談を促している。

行政・政治：情報共有シートで虐待防止 伊那市が医療機関と連携

長野日報 2016年2月21日

伊那市は、高齢者や障害者、児童らを虐待から守るため、市内の医療機関と連携し、診察の際に虐待が疑われる場合に市へ通報する「情報共有シート」を導入する方針を固めた。情報共有の仕組みを構築し、虐待への早期対応に結び付ける狙い。医療や福祉などの関係者や有識者でつくる市権利擁護ネットワーク連絡会に作業部会を設置。来年度にかけて具体的な活用方法などを検討し、2017年度の運用開始を目指す。

高齢者、障害者、児童の虐待に一体的に対応するのが特徴。医師が診察時に、患者の外傷や態度などを確認した上で、虐待の可能性や状況、身体所見、家族構成などをシートに記入し、市の担当部署に通報する。一方、市側から調査や対応の協力を依頼する「提供シート」も作成する。これに伴い、市は虐待や通報の判断基準などをまとめたマニュアルも並行して作成。作業部会で具体的な協議を重ね、連絡会で決定する。来年度末にはマニュアルを公表し、シートの運用を始める予定。将来的には福祉施設などの関係機関や市民にも協力の輪を広げたい考えだ。

17日夜に市役所で開いた作業部会の初会合では、シートの具体的な活用方法や個人情報の取り扱いなどについて議論。「該当事案がみられるのは救急外来の時間外が多い。いつでも担当者と連絡が取れる体制づくりを」「基準を設けるのも大切だが、迷ったら通報する意識を共有すべき」などの意見が出された。

市の担当者は「現状ではケアマネジャーからの通報がほとんど。疑わしいと感じたら通報する意識を高めたり情報源を増やすことで、虐待の早期発見、対応に結び付けたい」としている。

心停止の患者 水素で脳ダメージ軽減 臨床研究開始へ NHKニュース 2016年2月20日

心筋梗塞などで心停止状態になった患者に水素ガスを吸わせることで、寝たきりになるなどの後遺症を減らそうという臨床研究を慶応大学病院など全国12の医療機関が始めることになりました。効果が確認できれば、早ければ3年後には医療現場で広く行えるようにしたいとしています。臨床研究を始めるのは、慶応大学病院のほか香川大学病院、熊本大学病院など全国12の医療機関です。

国内では毎年13万人が心停止状態になり病院に運ばれていますが、回復しても脳細胞がダメージを受け、寝たきりになったりことばが十分に話せなくなるなどの後遺症が残るケースが少なくありません。水素には細胞が死ぬのを抑える効果があり、慶応大学のグループはこれまで、ねずみを使った実験で心停止後の生存率を38%から71%に高め、脳細胞へのダメージも減らせることを確認しています。臨床研究では今後2年間にわたって、心停止状態となった患者180人に18時間、水素ガスを吸わせ安全性と効果を確認することにしています。効果が確認できれば、早ければ3年後には医療現場で実際に広く使えるようにしたいとしています。

慶応大学病院の堀進悟救急科診療部長は、「単に命を救うだけではなく社会復帰させるのが医療の目的であり、水素ガスの利用でそうした人を増やせる可能性があると考えている」と話しています。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行